

## 原著論文

# 看護系学生の医療関連のニュースに対する認知度 —看護師養成課程における課題—

伊丹 優、小川智子、塚本恭正

## 要 旨

背景：医療技術や治療薬、疾病に対する知見は日々進化し、それらについての情報が新聞やニュース、インターネットなど様々なメディアによって提供されている。こういったマスメディアを通して流される情報は、検証が済んでいない段階のものや科学者が記事を記述したものではないため、正確性や詳細さに欠ける面も指摘されるが、最新の医療や実際に社会で問題になっている医療について把握するには大切なことであると考えられる。

目的：看護学生が新聞やテレビなどマスメディアを通して報道される医療関連のニュースに対してどの程度興味を示し、積極的に知識として自分のものにしようとしているのかについて学生の意識を明らかにする。

方法：調査研究。A看護短期大学に在学する看護科、専攻科の全ての学生を対象とし、医療関連のニュースに対する意識を尋ねるアンケート調査を実施した。

結果：「摂取した食品による内部被曝」など概して学校で教わらない事項に関しては、多くの学生は興味をもつものの、他の人に説明できるほど理解してはいない。しかし、ニュースの内容が「歯周病が動脈硬化や低体重児出産のリスクを高めていること」など授業で扱われていなくても将来就く職業に関連するニュースに関しては、地域看護学専攻と助産学専攻の学生は、よく理解しており、意識してアンテナを広げていた。また、授業や実習で学習した内容に関連するニュースに関して看護学生は強い興味を示した。医療関係のニュースについて時々友人と話すことはあるが、詳細なところまで理解していないために、会話も表面的なものでとどまっていた。

考察：新聞やテレビが伝える医療関連のニュースは断片的であったり、話題性はあるが説明が乏しいなど医療を志す学生にとっては物足りないものである。マスメディアを通して得られる医療関連のニュースは看護学生にきっかけを与えているに過ぎない。授業もそうであるが、受け身の態度で情報に接している限り、医療職者としての役割は果たすことができず、自ら詳しく知ろうとして調べていく過程があってこそ自分自身の知識として活かされるのではないかと考える。学生は将来就く医療職を強く意識すべきであり、一般向けに情報提供しているテレビや新聞においてもアンテナを広げていき、得た医療関連の情報をさらに自分で学習する姿勢が大切だと考える。

キーワード：医療関連情報、看護学生、健康、学習

所属：Yuu Itami, Tomoko Ogawa, Yasumasa Tsukamoto

岩手看護短期大学 看護科

## 序 論

医療技術や治療薬、疾病に対する知見は日々進化し、それらについての情報が新聞やニュース、インターネットなど様々なメディアによ

て提供されている。こういったマスメディアを通して流される情報は、検証が済んでいない段階のものや科学者が記事を記述したものではないため、正確性や詳細さに欠ける面も指摘され

るが、最新の医療や実際に社会で問題になっている医療について把握するには大切なことであると考えられる。

特に看護職者は患者と向かい合う時間が他の医療職者よりも多く、新聞やテレビなどで治療などの情報を得た患者が看護師にその情報について質問をすることも多いのではないかと予想される。

最新の医療が教科書に記載されるには何年もの時間がかかることから、医療職者が最善の医療を提供するには、医療関係の情報に対して積極的にアンテナを伸ばし、得られた情報を自分の知識や教科書、論文などと照らし合わせ、理解し、吟味して取り入れることが求められる。昨年発表された先行研究では、「歯周病が早産・切迫早産に大きな影響を与えている」ことを知っている看護学生が少ない<sup>1)</sup>ことが報告されている。私は、生活習慣病の一つである歯周病のようなありふれた疾患が妊婦に重大な影響を及ぼす知見が医療を志す学生にあまり知られていないのか疑問に思った。

そこで本研究では、将来医療職者となる看護学生が医療関係の知見に対してどの程度理解し、関心や興味をもち、知り得ようしているのか調査し、看護学生の最新の医療関連の知見に対する意識の現状を明らかにした。そして看護学生が最新の医療についてより意欲的に情報を活用するにはどのようにしたらよいかについて考察した。

## 研究方法

### 研究対象

研究の主旨を説明し、同意を得られた3年課程の看護短期大学の1年生70名、2年生66名、3年生68名、及び専攻科の地域看護学専攻（以下「地域」と記述）の24名と助産学専攻（以下「助産」と記述）の18名の学生を対象とした。

### 調査期間

平成24年4月～7月

### アンケート調査

質問用紙は無記名自記式質問用紙を作成し、研究主旨、倫理的配慮事項を口頭で説明した。

質問用紙の表紙にも主旨、倫理的配慮を明記し、承諾の得られた学生に配布した。同意を得た上で質問用紙に記載してもらい、その場で回収を行った。

### 調査項目

- 1) 対象の属性（学年、性別、入学前に社会人の経験の有無）
- 2) 各医療情報についての知見の有無、情報源、興味の有無
  - ・摂取した食品による内部被曝について
  - ・歯周病が動脈硬化や低体重児出産のリスクを高めていること
  - ・アレルギー治療に用いられるステロイド薬の副作用について
  - ・花粉症の減感作療法について
  - ・携帯電話の出す電波と発がんリスクについて
  - ・ピンクリボン運動について
  - ・子宮頸がんワクチンの接種開始について
- 3) 現在住んでいる家・アパートでの新聞を購読の有無・新聞の種類
- 4) 短期大学に設置されている新聞の利用頻度
- 5) 授業や実習の調べ物以外にインターネットなどで医療関係のニュースなどを読む頻度
- 6) 新聞など科学欄、医療欄などの科学・医療記事を普段から意識して読む頻度
- 7) 興味を持ったニュースなどをインターネットでさらに詳しく調べる頻度
- 8) 普段から医療関係のニュースについて同級生・友人・家族と話す頻度
- 9) 新聞・テレビなどで最近の医療関連の知見をチェックする必要性の程度・その理由

### 分析方法

調査結果をもとに、単純集計を用いて分析した。

### 倫理的配慮

アンケート実施時に、調査の趣旨、得た情報の匿名性を保障し、個人のプライバシー保持すること、調査への協力を辞退されても何らかの不利をこうむらないことを説明した。また、結果は統計的に処理し、研究目的以外には使用しないこと、研究後直ちに質問用紙を破棄する

ことを説明した。

## 結果と考察

### 国民が関心を持っている「食品による内部被曝」についての知見の有無

「摂取した食品による内部被曝」についてどの程度知見を持っているかについて調べたところ、「他者に説明できる」と「説明できないが、ある程度理解している」と答えた学生は、1年生で41%、2年生で41%、3年生で38%、地域で50%、助産で44%と学年で顕著な差はみられず、約4割の学生がある程度知見を持っているが、半数以上がよく知らないと答えた。

この食品による内部被曝について学年間で知見の有無についての差が見られないのは、学校で教わらないからであると考えられた。また、「他者に説明できる学生」は3%しかいないことは、日本国民が現在最も関心を持っていることを考えると将来医療職者を目指す者としては心許ないと感じる。しかしこれに関して興味を持つ学生は各学年とも約8～9割いることから、興味を持った時にさらに自分で調べたり、学習しないことが「他者に説明できる」学生数が少ない原因だということがわかる。これは、これまで授業で取り扱ってこなかったことや他者に説明する必要がなかったためであると考えられるが、こういった事柄は国民の重大関心事であり、今後の医療現場で必要とされる可能性がある事項であるので自ら学習し理解を深め行く必要があると考える。

### 「歯周病と動脈硬化や低体重児出産の関連」についての知見の有無

その中で「歯周病が動脈硬化や低体重児出産のリスクを高めている」ことに関しては、「他者に説明できる」と「説明できないが、ある程度理解している」と答えた学生は、1年生で7%、2年生で32%、3年生で31%、地域で79%、助産で56%であった。また、情報源として看護学生・地域の学生は、テレビ、助産の学生は授業や友人・家族を挙げていた。

看護科に比べ専攻科の学生のほうが多い理由として考えられるのは、地域の学生は将来、健

康指導に携わる可能性があり、助産の学生は出産に携わることから、このような情報に関しては意識して情報を得るためのアンテナを伸ばしているからだと考えられる。助産の学生は授業でこの問題について学習しているが、地域の学生は授業では習っておらず、保健師の職務に関することは普段からテレビなどから情報を得るよう心がけていることが示唆された。それと比べ看護学生、特に1年生は職業意識があまり育っていないのと授業で扱われていないため知る機会がないため知見を持っている学生が少ないのだと考えられる。

### 「ピンクリボン運動」についての関心の有無

また、「ピンクリボン運動」については、「他者に説明できる」と「説明できないが、ある程度理解している」と答えた学生は、1年生で56%、2年生で48%、3年生で62%、地域で79%、助産で78%であった。これは、上記の「歯周病が動脈硬化や低体重児出産のリスクを高めていること」についての知見の有無の学年間の傾向と似ている。これは、地域の学生は保健師として早期発見の指導、助産の学生は助産師として女性生殖器疾患に関わることを予期して意識して情報を集めているものと考えられる。

看護学生は、現段階で必要性が実感できていないからではと考えられ、それぞれになりたいと思っている職種で強く意識するかどうかで違いが出るのではないかと考えられる。

### 「アレルギー治療に用いられるステロイド薬の副作用」についての関心の有無

「アレルギー治療に用いられるステロイド薬の副作用」については、「他者に説明できる」と「説明できないが、ある程度理解している」と答えた学生は、1年生で21%、2年生で38%、3年生で63%、地域で88%、助産で94%であった。学年が上がるにつれて理解が深まっており、加えて地域、助産の学生は「他者に説明できる」人が多いことがわかった(それぞれ58%、44%)。また、情報源として1年生はテレビが大半を占め、2年生から授業・実習が加わり、3年生・専攻科の学生は授業・実習、教科書が大半を占めていた。このことにより、授業で教わり実習

で患者さんの内服薬として、ステロイド薬が含まれていることがあり、ステロイド薬の重要性を認識し自己学習として副作用など調べ知識が深まっており授業・実習及び自己学習の成果が出ていると考えられる。そのため、1年生は授業でまだ教わっていないことや、実習が始まっていないため、重要性を知識に繋げることができていないため、他者に説明できるまでに至っていないと考えられる。これらのことから、授業・実習を通して必要性・重要性を認識し、自己学習が大切であると考えられる。

### 子宮頸がんワクチンの接種開始についての関心の有無

子宮頸がんワクチンの接種開始については、全ての学年で他の質問項目の中で一番理解度が高く、「他者に説明できる」と「説明できないが、ある程度理解している」と答えた学生は、1年生で63%、2年生で76%、3年生で71%、地域で91%、助産で94%であった。これは、接種開始時にマスコミで大きく取り上げられたことや、対象者は大半が女子学生であったため、自分自身に関わることであるからではと考えられる。また看護科の学生の情報源として2年生から授業で学んでいることも大きな理由となっていると考える。

この事項について良く理解しており、「他者に説明できる」とした学生は、「他者に説明できる」と「説明できないが、ある程度理解している」と答えた学生は、1年生で11%、2年生で17%、3年生で21%、地域で42%、助産で33%であった。特に地域や助産の学生で知見をもつ学生が多いのも保健師や助産師の職務と深く関係するからであると説明できる。

### ほとんどの学生は新聞を読まないがテレビはよく見ている

今回調査した医療関連のトピックに関してテレビから情報を得ているという回答が多かった。医療情報を扱うマスメディアは、テレビ以外にも新聞や雑誌、インターネットなどがあるが、新聞に関しては「新聞の科学欄、医療欄などの記事を普段から意識して読んでいますか」という問いに対して、「なるべく読むようにし

ている」や「時々読む」と答えた学生は、1年生で37%、2年生で26%、3年生で22%、地域で50%、助産で28%であり、半数以上の学生は新聞を情報源として活用していなかった。

考えられる理由として、新聞を読む習慣がない、あってもテレビの番組欄やスポーツ欄などの娯楽欄などに限られるからではないかと思う。新聞を読むゆとりや時間がないという理由や情報源としての新聞に期待していないなどの理由も考えられる。また、親元を離れて生活している学生は生活費を切り詰めるために新聞を購読していないということも考えられる（各学年を通して約半数の学生が購読していない）。また購読している新聞も科学欄や医療欄が充実している朝日新聞や読売新聞などの全国紙ではなく、ほとんどの学生の家庭では地方紙の岩手日報であることも影響していると考えられた。ただA看護短期大学では学生が新聞を読むように玄関ロビーに全国紙を2紙と地方紙を2紙閲覧できるようにしているが、「ほぼ毎日読んでいる」「週に2～3日読んでいる」と答えた学生は、1年生で4%、2年生で2%、3年生で3%、地域で8%、助産で6%であり、ほとんど活用されていないことが明らかになった。

看護師を含む医療職者は医療関連の情報だけではなく、患者とコミュニケーションをはかるためある程度社会情勢などに関しても通じている必要があると思う。学生が新聞を活用するようにするためには、教員が入学した際の時期に新聞の内容を取り入れた授業を行ったり、授業などの初めに「今日の～ってニュース見た？」など聞き必要性を学生に実感させたりしていくことが有効なのではないかと考える。

### 医療関連のニュースは学生間で時々話題になるが深くは話さない

「医療関係のニュースについて同級生・友人・家族間で話題にするか」という質問に関しては各学年とも「よく話す」と答えた学生はほとんどおらず、「時々話す」や「たまに話す、めったに話さない」と答えた学生が大半を占めた。

このことは、時々軽く話題にはするが、マスメディアを通して得られた情報は話題性が先行

し、知識として深いものが少ないため、内容を十分に理解できていないからではないかと考える。内容に関して詳細なところまで押さえていないために、会話も表面的なものでとどまっていることが想像される。

### マスメディアを通して得た医療関連の情報を活用するにはさらに自分で学習する姿勢が必要である

「新聞などの科学欄、医療欄など科学・医療記事を普段から意識してなるべく読むようにしている」と答えた学生について詳細に分析したところ、「新聞を読んでいても、理解が深まっているわけではない」と答えた学生がほとんどであった。ただ、臨地実習を経験した3年生の中にはテレビなどで得た医療関連のニュースを授業や実習と結びつけて知識を深めようとしている学生もいた。

上記の結果は知識を自分のものとし他者にまで説明ができるまでに至るには、授業・実習などを通して必要性を感じ自己学習に発展していくことが大切であることを示唆している。

「興味をもった医療関連のニュースなどを教科書やインターネットでさらに詳しく調べたことがありますか」という質問に対して、「よく調べる」や「時々調べる」と答えた学生は、1年生で39%、2年生で42%、3年生で46%、地域で71%、助産で50%であった。

約4～7割の学生が興味を示したニュースに関してさらに詳しく学習したことがあると回答したが、残りの約半数の学生は興味を示しても調べるほどではない、面倒くさい、調べる時間・ゆとりがないなどを理由として自己学習に結びつけてはいなかった。

### 看護師を目指す上で最新の医療関連を実際にチェックしていく必要がある

「将来活躍する看護職者を目指すには、新聞・テレビなどで最新の医療関連の知見をチェックする必要性を感じるか」という問いについて、「強く感じる」や「ある程度感じている」と答えた学生は、1年生で100%、2年生で98%、3年生で99%、地域で96%、助産で100%と、ほとんどの学生が必要性を感じている。

その理由として1年生は「医療は日々進化しているため、知っておくべき」と答えた学生が大半を占め、学年が上がるにつれて、「患者さんに情報を提供するため」や、「コミュニケーションに役立つため」が加わった。また、地域や助産の学生は、「時代の流れ、制度の変化に対応するため」や「国家試験に関連した問題も出題されたから」、「外来受診患者の中にはテレビを見てきたという方が来院したり、情報を多く下調べしてきてからいらしてたりする人が多い」などの理由も加わった。これらの学年をおうごとに理由が変化していくのは、入学したばかりの1年生は、希望に燃え、最新の医療について知ったいこうとする強い意欲を持ち、進級して実習を通して患者さんに直接関わっていく中で情報提供やコミュニケーションを行っていく上で知識の重要性を感じたことを反映しているからだと考えられる。ただ、3年生や専攻科の学生は、臨地実習、卒業・修了研究、就職活動、国家試験対策などで忙しく、「知っておくべきであるが、時間がないため実際調べることができない」と答える学生もいた。

これに関連して少数意見ではあるが、「新聞、テレビなどでチェックすることも必要だと思うが、テレビなど聞いても詳しいことまでは報道されないため、授業などで聞いた方がわかりやすい」という意見もあった。新聞やテレビが伝える医療関連のニュースは断片的であったり、話題性はあるが説明が乏しいなど医療を志す学生にとっては物足りないものである。

### まとめ

たとえテレビや新聞などで医療関連のニュースを見たり読んだりして興味をもっても、授業や実習で学習していなかったり、他者に説明する必要がない事柄の場合、自分でさらに詳しく調べたりすることはあまりしない学生が多い。

ただ、健康指導に携わる保健師や、出産に携わる助産師を目指している学生は、将来必要とされる医療関連のニュースに積極的にアンテナを伸ばしていた。なりたいたいと思っている職種を強く意識するかどうかで医療関連のニュースに

対する取り扱い方に違いが出るのだと考えられる。

また、授業・実習を通して必要性・重要性を認識することにより、テレビなどで得られた情報を自分でさらに深く掘り下げることにつながっている。

## 結 論

マスメディアを通して得られる医療関連のニュースは看護学生にきっかけを与えているに過ぎず、そこでとどまっていたら、テレビを見

て自分自身に当てはまることだと感じ、そのことに関して調べてくる患者に対応することができない。授業もそうであるが、受け身の態度で情報に接している限り、医療職者としての役割は果たすことができず、自ら詳しく知ろうとして調べていく過程があってこそ自分自身の知識として活かされるのではないかと考える。

## 謝 辞

本研究に御協力して下さった学生の皆様に深く感謝いたします。ありがとうございました。

## 引 用 文 献

1) 小原陽菜子：女子看護学生を対象とした早産・切迫早産予防と歯科保健に対する意識調

査 平成23年度岩手看護短期大学卒業研究, 2011